

コラム4 佐用町佐用連合自治会長の活動より（平成21年熱帯低気圧・台風第9号による大雨）

静かな町が一転して・・・台風9号による大水害に襲われて

木村 政照

佐用町は2005年10月、旧佐用郡4町（旧佐用町、上月町、南光町、三日月町）が合併して誕生しました。兵庫県の最西端に位置し、西は岡山県に接し、面積は307.51k㎡で兵庫県の約3.7%を占めています。人口は20,000人強と兵庫県の0.34%に過ぎず、少子高齢化が進んでいます。地形は中国山地の東端部に連なる西播磨山地を源として北から南に千種川水系が中央を貫流しており、平地の占める割合がわずかで、山林などが多くを占めています。

8月8日に日本の南で発生した熱帯低気圧は北上しながら9日21時に台風9号となりました。この熱帯低気圧及び台風の周辺の湿った空気の影響で、佐用町では、1時間雨量が89.0mm、24時間雨量は327.0mmと観測史上1位を更新し、総雨量では349.5mmとなりました。この豪雨は、人的被害をはじめ、広範囲に及ぶ浸水、河川、道路、農地・農業用施設等の損壊や農産物の被害など甚大な被害をもたらしました。また役場本庁が浸水し、役場からの情報が途絶えました。

1. 江川地域について

私が代表を勤めさせて頂いております江川地域は、佐用町の中心部まで最短部で約2km、最長部で約9kmに位置する佐用川の支流である、江川川とその無数の支流が形成する谷に沿って「全国の棚田百選」に選ばれた地域も含め、11集落が点在しています。

平素は大変静かな自然環境に恵まれた農林業とともに頑張ってきた435世帯、約1,280人の中山間地域であります。その内、江川川の最も下流域にあるのが私の住んでいる77世帯の福澤集落です。

2. 当日の状況

(1) 「あ・うん」の呼吸

平成21年8月9日、あの悪夢としか言いようのない、台風9号による未曾有の大水害に襲われました。

当日は日曜日だったので、私は自宅で、9月19日実施予定の「江川地区敬老会」の案内準備をしていました。翌日、役場に出向き印刷するため、その用紙等事務用品を町の量販店で買い求め、その足で地元集落のクラブ（集会所）に立ち寄りコピーを終え、自宅に引き上げました。

時間は18時頃だったと思います。今、考えるとあの時の雨足は普段よりはよく降っているなあ～と感じはしたものの特段気にはしませんでした。

その後、夕食を取っている時、防災行政無線で「町消防団の召集」放送を聞きました。

早速、私も外の様子を見ようと自宅の玄関を開けたところ、何と驚きです。つい先とは打って変っての雨の降り様でした。これがニュース等で聞いていた「バケツをひっくり返した様な雨」だったのです。

「クラブを開けに行ってくるわ！！」と大声で家内に言って出かけようとしたところ、電話がジャン、ジャンとなり始めました。

集落内のある隣保長（自治会役員）からでした。「土囊どこへ行ったらあるのかな～」

私は、普段から自主防災組織（自衛消防隊を中心に活動）の役柄もあり、機会あるごとに地域内の安全点検パトロールを実施してきている経験から、すぐさま「その保管場所」を示すことが出来ました。

その間、2～3分だったかと思います。さあ～クラブへ・・・・・・と再び玄関先を見ると庭が泥水で川と化していました。家内が家の奥から「雷落ちたん違う！大きな音がしたで！」と大声で叫びながら出てきたその瞬間、泥水が板張の廊下の上を流れ出したのです。

(2) 暗闇の中で避難

私は、間髪入れず「避難せなあかん！早よう準備しろ！」と言い残し、電話又電話のベル、受話器を置けば又電話、その電話の応対で身動きが出来ませんでした。

家内と息子の妻は、祖母と障害のある次男とともに先発避難行動をとりました。

既に周りは暗闇でした。自宅裏の状況確認もできないまま、私は、隊長（自衛消防隊）に携帯電話でそれまでに電話連絡を受けた被災宅へ急行する旨の指示をしました。

普段から「あ・うん」の呼吸・・・・・・・・これ程頼もしく感じたことはありませんでした。

そうこうしている時、我が地域の隣保班長（自主防災組織役員）が大声で「避難して下さい」と戸別に訪問確認の行動をとってくれていました。これ又、「あ～ん・うん」の呼吸・・・・・・・・「〇〇と〇〇を〇〇〇〇宅に避難してもらいます。」・・・・・・・・と、的確に私に報告してくれるやいなや、「会長も早く避難をして！・・・・・・・・」と暗闇の村へ走り去りました。

電話が一応途切れたのを機に、私もクラブへの避難行動に移りました。20時頃だったかと思います。

ところが、自宅から町道（急な坂道）を經由し、江川川に架かる橋を渡り、県道下庄佐用線に何とか出たものの、県道の護岸の一部が流失し、既に濁流が低いところからガードレールを超え車が通行できなくなっていたのです。今渡った橋も引き返せない状況で、後へも先へも進むことが出来ませんでした。

先発した家内達の車もその停滞の渦中にあったのです。見る見るうちに水量が増しこれでは車ごと流されてしまうと判断し、すぐさま私は、近くにいた消防団員と連携、声を掛けあいながら県道上の車の誘導処理にあたりました。何とかして、道路上の車は誘導処理でき、身柄は県道沿いにある2階建ての家に緊急避難させてもらったのです。

その時、既に1階は脛を越える程床上浸水していました。電気が点いたり消えたりする不安の夜、地域の方と一緒に発電機の準備をすることが出来ました。

暗闇の中、その周辺の人家裏山が崩れる不気味な音が何度か聞こえました。家屋の被害が気にかかり見に行こうとする人に「絶対家に近づいたらあかんで！・・・・・・・・」と何度も警告を発しました。

そんな中、頭から全身ずぶ濡れの見知らぬ一人の若い女性が、か細い声で「電話貸して欲しいのですが・・・・・・・・」と辿り着かれました。よ～く話を聞いてみると、先ほど護岸の一部が流失した県道付近を佐用方面に向かって車を運転中、急に車体が浮き上がり一回転して反対方向を向いて辛うじてガードレールに寄り添うようにして停まっているとのことでした。「生きた心地がしなかった」とふるえていらっしやいました。携帯電話の電池切れで家族との連絡がとれなくなっていたこともわかりました。

暗闇の中、ましてや降り続く豪雨の中での行動、あのままの状態、あと10分もすれば車ごと流され大変なことになっていたかと思うと、今でも背筋がゾーとして言葉が出ません。

23時を過ぎた頃、急に雨足が緩やかになったと感じた途端、見る見る水嵩が減りはじめたのです。

しめた！と思い、県道沿いの家で緊急避難していたそれぞれの4家族全員、県道片側が通行できることを確認し、クラブへの移動に切り替えました。移動を終えたときには、既に日付が変っていました。この時、クラブでは、30人余りが避難しており、集落内に人的被害のないことも確認できました。

3. 応急復旧への対応

(1) 翌日8月10日(月)

朝が明けるのを待って、自治会役員が手分けをして集落内を巡回して、被害状況の把握と情報写真撮影をするよう指示しました。

見回った中で、特に土石流での被害が激しい谷川、生活道路や人家裏山崩壊等などの(緊急) 応急復旧対応について指示を受けるべく町担当課に連絡をしました。地元自治会長の確認のもとに対応することで了承を得ましたが、この時、初めて町役場中枢機能が水没し、麻痺状態で、どうにもならない大被害になっていることが分ったのです。

幸いにも、地元役員の中に小型重機を保有している方があり、緊急性の高い生活道路など最小限の土石・土砂除去作業を依頼しました。

午前中、私も現場に立ち会いましたが、場所によっては、その堆積量の多さに驚かされました。思うように仕事が捗らず困難を極め、午後からは地区内の専門業者の応援を求め、とりあえずの緊急対応をするという作戦をとりました。

その夜、緊急役員会を開催しました。内容は、いち早く集落独自による被災状況調査書に各隣保ごと記入報告を依頼するものでした。(この時点では町から指示はなく、8月16日付けで町災害対策本部へ集約した災害状況報告書を提出しました。)

(2) 8月11日(火)

前日深夜から未明にかけて町水道が断水となったため、飲料水の緊急確保を災害対策本部に要請したところ、早速、8時には明石市よりの給水車の派遣支援を受けることができました。以後、約一週間にわたって、入替わり立替わり給水車の派遣を継続していただきました。

普段無尽蔵に使用していた生活用水の何と有り難いことか。これ程、地域の皆が感激したことは無いと思います。ある一人の老婦人が、「自治会長さん、お代は幾らお支払いさせてもらったらいいのでしょうか？」こんな会話が実際にありました。

只々、感謝あるのみでした。

給水車の派遣要請も地域の誰もが初めての体験となりました。

私自身このように、災害発生から三日間、自宅に戻ることもなく、クラブでその任に付かせていただいた事、成すこと全てが初体験となりました。

お盆の8月14日には、例年集落の恒例行事となっていた「ふれあい納涼祭」も急遽取りやめて、集落あげでの「一日ボランティアの日」に設定し、地域内の被災者宅にそれぞれ応援に行っていただくことに切り替えました。

何の抵抗もなく、多くの皆さんの参加が得られ大変嬉しく感謝したものです。

毎日が一日中、地元集落内活動に追われ、江川地域全体の災害状況の把握が出来たのが、8月20日を過ぎてからでした。今後の反省点の一つと考えています。

しかし、町全体でかって無いこれだけの人的災害の発生をみる時、当江川地域11集落において人的被害が無かったのが何よりもの救いであり、感謝をしているところです。

以上、今回の大水害について、発生初期段階での私の体験した一端を思い出すままに記してみました。

4. 今後に向けて（考察）

避難場所の選定は・・・・・・洪水と地震・台風は同一場所でよいのだろうか？

避難の判断は・・・・・・誰が？どの時点で？その基準は？誰のために？

リーダーは・・・・・・地震が被災者となった場合？

役割：平常時は？役割：緊急時は？

マニュアルは・・・・・・目的は？誰のために？その基準は？必要性は？

訓練は・・・・・・目的は？誰のために？その基準は？必要性は？

伝達方法は・・・・・・誰が？どの時点で？何を活用して？どのように？

今回の被災体験をとおして、私なりに普段から取り組んでいる「安全で安心な地域・むらづくり」とは・・・・・・？答えをもらったようです。まざまざと実感することが出来ました。

小さな事かもしれませんが、「普段・平常時が大切な事」が分りました。

☆臨機応変・・・・・・「あ・うん」の呼吸

☆地域をもっと知る・・・・・・「あれっ？」と変化に気づく（疑問に思う）

☆まずは動く・・・・・・決して無駄ではない（何かがある）

☆相互協力・・・・・・一人では限界がある。みんなで（顔を見せるのも協力）

☆過去の経験・・・・・・今後を活かす（継続は力に）

平成19年5月に国・県・町を通じて18年度実施された土砂災害防止法に係る基礎調査結果が発表されました。それによると当集落内には、土砂災害警戒区域（土石流5ヶ所）、（急傾斜地崩壊5ヶ所）の10ヶ所が区域指定されているのです。

こんな危機感もあって、20年度「土砂災害・全国統一防災訓練」に呼応して、6月1日、町担当課と連携して「当福澤地区初めての土砂災害・防災訓練」を試みました。

集落役員及び自衛消防隊招集にはじまり、人員確認、ミーティング、班編成、現地派遣調査、現地より情報伝達後、本部解散、本日の訓練反省会、全工程約2時間の訓練でした。

訓練を実施したことで、現地を自分の五感で掴んでいた強みがあり、この度の災害で非常に役立ったと確信しています。

5. むすび

現在、町あげでの復興の兆しはみえているものの、元に復すには相当の時間が掛かるものと予測されます。

そんな中であって、ややもすると元気を失いかけている私達集落自治組織がどう機能すればよいのか・・・・・・

先にも述べさせて頂きましたが、答えは簡単。「地域のことは、その地域の人が一番良く知っている」肩肘張らずに「普段が大切」「時代に即応した柔軟な体制」「臨機応変」にこれからは『安全・安心のむらづくり』にこだわりを持って、地域自治活動の一端で頑張りたいと考えています。

関係行政機関各位には今後ともご支援ご協力をよろしくお願い申し上げます。

この度私どもに、このような形で事例掲載の場を与えて頂きまして有難うございました。合わせてこの度の災害に対しまして物心両面にわたる数々のお見舞、ご支援をいただきました全国の皆様に心から感謝とお礼を申し上げ、結びとさせて頂きます。

※ 原文のまま掲載しました。